

The relationship between premorbid intelligence and symptoms of severe anorexia nervosa restricting type

著者	緒方 慶三郎
ファイル(説明)	博士論文全文 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
別言語のタイトル	病前知能と重度の制限型神経性食欲不振症の症状との関係
学位授与番号	17701甲総研第675号
URL	http://hdl.handle.net/10232/00032151

論文審査の要旨

報告番号	総研第 675 号	学位申請者	緒方 慶三郎
審査委員	主査	田川 義晃	学位
	副査	桑木 共之	副査
	副査	橋口 照人	副査
			奥野 浩行

The relationship between premorbid intelligence and symptoms of severe anorexia nervosa restricting type

(病前知能と重度の制限型神経性食欲不振症の症状との関係)

制限型神経性食欲不振症(anorexia nervosa restricting-type; AN-R)の治療場面では、医療者の患者への心理教育などに対して、患者の理解が十分に得られないことが多く、治療に難渋することが多い。これは患者の肥満恐怖だけでなく、理解力や記憶力の低下も影響していることが考えられる。AN-R患者の認知機能に関連した先行研究では Wechsler Adult Intelligent Scale Third Edition (WAIS-III)によって調べられた知能指数が平均的であることを報告するものが多く、それらの研究参加者の Body Mass Index (BMI)は16程度である。一方、Koyamaら(2012)はBMIが平均12程度の患者群を対象とし、知能指数が75程度であったことを報告している。しかし、シビアな低体重を示すAN-R群が特性として低IQであったのか、低体重によって低IQの状態を示しているのかについては明らかでない。AN患者を対象とした記憶力の研究においては、体型や食物などのANに関連した情報が記憶されやすいことを示唆する先行研究がある。これまでの研究においては、標準化された記憶力検査である Wechsler Memory Scale-Revised (WMS-R)の一部の課題のみが研究に使用されていて、記憶指数を的確かつ包括的に評価できたとは言い難い。そこで本研究では、平均BMI=12.65(1SD=1.47)のAN-R患者を対象として、WAIS-III、Japanese Adult Reading Test (JART)、WMS-R、The Eating Disorders Inventory-2 (EDI-2)などを用いて、①病前推定IQと病後IQとの比較、②IQ低下とAN-R症状との関係、③重度AN-R患者における記憶力、について健常群との比較検討を行った。

その結果、以下の知見が明らかにされた。

- 1) AN-R群の病前推定IQは正常域にあった。
- 2) AN-R群において病前推定Performance IQ (PIQ)と比べて病後PIQは有意に低下していた。
- 3) 病前・病後のPIQ値と、EDI-2の下位尺度である「体型不満」とに有意な正の相関が示されていた。
- 4) AN-R群のWMS-R値は概ね正常域であったが、下位尺度の遅延再生の値が正常域下限に近い値であった。

本研究の結果によって、重症AN-R患者が訴える体型不満足感は体重低下によってより強固となっていて、体重回復後に体型不満足感に介入すること、重症ANの治療アウトカムのひとつとしてWAISを用いたIQ検査を継続的に実施することが有用である可能性が示唆された点において興味深い。よって本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判定した。